

渡辺志桜里《地霊》 ステートメント

能舞台の下に大甕が埋まっている。と、たまに聞くことがあった。人目につかない暗い舞台下で、大きな甕がぼっかりと真っ黒な口を開けている姿を見てみたい。それが今回の作品の契機になったように思えます。能舞台の上下構造を考えると、能の成立と日本国の成立は同じような構造のもとに生まれたのかもしれない、と、ふと思った。

土蜘蛛という演目がある。源頼光を怪しげな術で苦しめる土蜘蛛という妖怪を家来たちが倒す、という内容だが、この土蜘蛛というのをよくよく調べると、日本列島にヤマト王権成立以前から先住しており、ヤマト王権に逆らい、征服されていった勢力ということらしい。脛が長いという身体的特徴を持っており、それが土蜘蛛という蔑称になったという。

こう言った構造は日本列島各地に存在し、時代や地域でその名を変えるが、現代の私たちがよく知っているのは鬼という存在だろう。

能にはそもそも憑依することによって鎮魂をするといった面が色濃くあり、救われない魂や精霊や靈魂は足拍子の所作によって召喚されたり祓われたりする。この足拍子の上から下へ踏みつけるような所作、舞台下で震えるように共鳴する見えない甕は、さながら土蜘蛛の窟を踏みつけ固めた上に出来上がった「クニ」ということになるのか。

本作は、主に東京以西で録音された、これらにまつわる音源で構成された24時間にわたるサウンドインスタレーションである。3時間毎に「キャラクター」が移り変わり、独自の御伽噺やナレーション、曲などが「主音源」として一つのカメから流れる。他の2つはキャラクターに即した副音源、残り4つが24時間対応の副音源としてランダムに流れ続けるようにプログラムされている。

それぞれの「キャラクター」は以下の通りである。

1. 葛城土蜘蛛
2. 温羅
3. 来訪神
4. 九州土蜘蛛
5. 隼人
6. 長髓彦
7. 魔

こう言ったストーリーに潜むその土地その土地の権力構造は列島各地に存在する。正史に語られない敗者のお話を探することで、今一度日本国というものを見直せるのでは無いか。

とはいえ、能で倒すべき敵であるはずの土蜘蛛が非常に魅力的に描かれているところを見るに、もしかしたら本質はこちらにあるのかもしれないとすら思う。金春禅竹が、能の最重要演目である「翁」は「鬼」であるという旨の文章を残していることから、鬼とされたものたちは、支配からすり抜けて「影」となり、芸能という聖域の内部で生き残ることで、王権の秩序（表層の正史）を列島深層で揺るがす地霊として、「裏の精神ネットワーク」を形成してきたのではないかと思われる。

渡辺志桜里

各「キャラクター」と主音源のあらすじ

1. 「葛城土蜘蛛」

神武東征話では、この地にもともと生息していた土蜘蛛（ではなかろうか）、長髓彦が葛城山にて神武天皇を一度制圧するも、再度葛の網で捉えられたことからこの土地が”葛城”と呼ばれるようになり、この話が後の源頼光による妖怪土蜘蛛倒しの演目へと昇華される。葛城周辺には蜘蛛窟なるものが幾多存在するが、一言主神社には胴体、手足をバラバラにされた土蜘蛛が埋められている。

あらすじ

大和朝廷が直線的な稲作による国造りを進める中、山を敬い鉱石を操る技術を持った先住民は「土蜘蛛」と呼ばれ、正史から排除された。が、地下水脈のように、形を変えて歴史の底を流れ続けた。役小角の鬼、信田の森の白狐、安倍晴明の式神など…。伝承における「異能の者」の正体は、古の記憶と技術を継承する土着の民「土蜘蛛」の末裔なのかもしれない。纏向の区画整備から現代の難波を覆うコンクリートに至るまで、国家の都市開発は自然の混沌を封じ込める装置だった。だが、抑え込まれた大地のエネルギーは、現代の様々なシーンにおいて、熱狂の中で周期的に噴き出している。書き換えられた歴史と、巨大な都市空間の底で。

2. 「温羅」

桃太郎の鬼のモデル。吉備（元岡山）にいた体長4メートルある鬼として「吉備津神社縁起」などに描かれている。実際には百済からの渡来民で、製鉄の技術を持って新山に「鬼ノ城」を建てた巨大勢力で、ヤマト王権には反抗的であった為討伐されたとされる。地方の民間伝承として伝わっていた「桃太郎」は、明治期に巖小波によって児童文学として語り直され、現代モデルとなった。同時期に、首相となった犬養毅は、自らを、桃太郎（ヤマト＝日本国）が従えた犬、雉、猿の”犬＝犬飼部”として、国家形成の立役者として自分をアイデンティファイする。温羅を倒した吉備津彦が祀られている吉備津彦神社には温羅の首が埋められ、その神社では「鳴釜神事時」という温羅の唸り声で吉兆を占う神事が今なお行われている。

あらすじ

吉備の国に流れ着いた百済の王子・温羅（うら）。村人に鉄の作り方を教え、地元の娘と結ばれて平和に暮らしていた彼は、大和朝廷によって「鬼」の名を着せられ退治されてしまう。豊かな吉備を恐れた大和は、自らの侵略を「正義の戦い」へとすり替えた。この論理は桃太郎の物語として語り継がれ、やがて近代日本の国定教科書に組み込まれると、「桃太郎海の神兵」や「空の桃太郎」、「桃太郎の海鷲」など数々のプロパガンダアニメが作られた。一方、桃太郎の従順な家来である”犬”の末裔である犬養毅は五・一五事件によって命を落とす。絶対的な正義が残酷な刃となる歴史の中で、討たれた温羅の魂は今も吉備津神社の釜の下で音を鳴らしている。

3. 「来訪神」

折口信夫が提唱した「マレビト（稀人・客人）」論に基づき、八重山に伝わる来訪神信仰を、日本芸能（能の翁）および鬼の原初的な姿として位置づける。

あらすじ

来訪神の表象は不可能だと判断したため、このキャラクターのみ言語を用いず、胎児の心音や妊婦の眩きなど、生命の発生の剰余を想起する音や、地震や火山の噴火など、人類のパースペクティブを超えた現象にまつわる音などから、一つの楽曲を制作。

4. 「九州土蜘蛛」

『日本書紀』や各国の『風土記』に大和朝廷に刃向かった「土蜘蛛（つちぐも）」として描かれた九州の先住民のモデル。歴史書の中では、手足が異常に長く洞窟に潜むバケモノや逆賊として記されている。ヤマト王権の到来以前から九州各地に独自のネットワークを築いていた巨大勢力。田油津媛（八女）や久津媛（日田）に代表されるように、大地の神託を聴く女性首長が地域を治める「母系制社会」であったとされる。ヤマト王権が持ち込んだ「父系制」や稲作（徴税）を中心とする中央集権システムと真っ向から対立したため、景行天皇や神功皇后の軍勢によって凄惨な討伐を受けた。大分では打猿（うちさる）や八田（やた）といった首長らが地の利を活かし、天皇を神頼みに追い込むほど激しく抵抗したが、制圧され、彼らの森は切り拓かれ、大和の富を生む田んぼ（血田など）へと強制的に環境改変された。

あらすじ

古代九州には、海人族の航海技術や女性首長を中心とする母系制社会など、自然と結びついた独自の文化があった。しかし、中央集権と稲作拡大を目指す大和朝廷は、彼らを「土蜘蛛」と呼び平定。豊かな森は切り拓かれ、税の基盤となる田園風景へと改変されていった。一方で、大和側が平定の軌跡を『日本書紀』に詳細に記録したことで、敗者たちの名や存在は文字として残り、逆説的にも現代へ伝えられることとなる。我々が目にする美しい棚田の風景の下に、いかなる歴史が埋もれているのか。正史では語られなかった土着の民たちの物語。

5. 「隼人」

九州南部の先住民であり、勇猛な身体能力を持つ隼人は、律令国家支配への抵抗（「隼人の乱」）を経て、完全に臣服。その際、征隼人大将軍として大伴旅人が派遣され、「我也征きて討たん」という宇佐神宮の神託を受けた。八幡神の分霊を乗せた神輿が作られ、その征伐は呪術的に決行されたが、これが、現在の日本列島各地に残る神輿の起源とされる。宇佐神宮ではこれを年に一度、10月に放生会として慣行している。

「隼人の乱」を鎮圧した朝廷軍は、戦功の証として、殺した隼人の首を切り取り、宇佐へと持ち帰った。

その数は非常に多く、「百体」（あるいはそれ以上）であったと伝えられており、これを首塚にしたものが、宇佐神宮の参道延長線上に「百体神社」として祀られている。

百体神社では3年に1度隼人の霊を鎮めるために「傀儡舞」を奉納し、九州の一部では「隼人舞」や犬の遠吠えといった隼人の名残が披露される。

あらすじ

むかしむかし、海をすいすいと駆ける兄「海幸彦（隼人）」は、山を歩く弟「山幸彦（大和）」に敗れ、大和の都を守る「番犬」としてワンワンと吠える役目を背負わされる。それからずっと後のこと。南九州の険しい「ななつの城」に立てこもり、大和に反旗を翻した隼人の末裔たちは、「お神輿」とひょこひょこ踊る操り人形を用いた騙し討ちで敗れ去った。彼らを鎮めるためのお社や、彼らを恐れさせたお神輿は、やがて熱狂的なお祭りへと姿を変えて日本中へ広がる。海の民の本当の姿は「浦島太郎」などの御伽噺に隠されるが、南九州の田舎道では今も、軽トラックに乗った隼人の神「ウォードン」が、静かに誇り高く遠吠えを山や街に響かせている。

6. 「長髓彦」

神話『記紀』において、神武天皇の東征に立ちはだかった畿内（大和地方）の先住勢力の首長。神武の兄・五瀬命（いつせのみこと）を討ち取るほど激しく抵抗し、天皇の軍勢を一度は退却に追い込んだ。実際には、ヤマト王権成立以前に豊かな畿内一帯を治めていた土着の王であったと考えられる。外部からの侵略者から故郷を守るために戦ったが、最後は主君であるニギハヤヒに恭順を理由に討たれ、正史では「最大の逆賊」として描かれた。勝者の論理によって悪役に仕立て上げられたが、日本建国以前に存在した強大な土着勢力の記憶として、その反骨の姿を今に残している。

あらすじ

大和王権最大の逆賊とされた在地首長・長髓彦。客観的データから浮かび上がる彼の真の姿は、野蛮な反逆者ではなく、大和盆地で高度な防衛網と連合政権を築き、神武軍を一度は完全に撃退した優秀な軍事司令官であった。しかし、迂回して再侵攻した神武軍と、同盟者である饒速日命が「同一の文化圏」を持つことが判明すると事態は一変する。新たな統治連合を組もうとする同盟者に対し、長髓彦は土地と民を守るため最後まで恭順を拒み、饒速日命によって暗殺されてしまう。彼の死は、出雲や吉備へと拡大する大和王権の合理的で冷酷な統治システムの起点となった。本作は、在地勢力の誇りを懸けて新興権力と対峙した一人の首長の抵抗の軌跡を描き出す。

7. 「魔」

人間に伝わる、二つ出現した太陽の一つを射ると、それが三本足の白い大鴉であったという伝説に基づく新作能。

あらすじ

入間川を渡ろうとする僧（ワキ）は、舟人（前シテ）から高麗（こま）の郷の歴史や、「入間」という地名の由来となった魔を射落とした伝説について教えられる。舟人は僧に高貴な亡霊の供養を依頼し、自らが「天皇の霊」であることを仄めかして姿を消す。僧が夜通し弔いの読経を続けていると、先の戦争で命を落とした兵士の霊と、戦火で傷ついた女性の霊（ツレ）が現れ、救済を求める。続いて、昭和天皇の霊（後シテ）が真の姿を現す。天皇の霊は、自ら神からのおり、人間としての宣言をし、僧の祈りと仏の慈悲により、「有情も非情もすべてに仏性がある（草木国土悉皆成仏）」という教えのもと、天皇や兵士、民衆、そして草木や国土に至るまで、すべての怨念が消え去るかのような瞬間、入間川の水は増幅し、その場にいたものたちはみるみるうちに水の底に沈んでしまう。

副音源を構成する音源一覧

- ・聖神社内で忘れられ、工事現場のバリケードで塞がれた蜘蛛窟内の環境音
- ・四天王寺にて。陸奥賢によるレクチャー
- ・住吉大社にて。陸奥賢のレクチャー
- ・安倍晴明の母「信太のきつね」の故郷、信太の森の環境音
- ・葛城一言主神社の参道にて。「土蜘蛛」について話す近隣の人のインタビューの再現
- ・能『土蜘蛛』より、源頼光の前に現れた土蜘蛛がその正体を表すシーン
- ・高鴨神社にて。現地の人へのインタビューの再現
- ・『古事記』中巻（神武東征）の一節。神武天皇（カムヤマトイワレヒコ）が忍坂（おさか：現在の奈良県桜井市忍坂）に到着した際、岩室（大室）に潜んで待ち構えていた尾の生えた土雲（つちぐも）「八十建（やそたける）」を、歌の合図とともに一網打尽にするシーンの朗読
- ・『日本書紀』（神武天皇即位前紀己未年2月の条）の、大和の「土蜘蛛（つちぐも）」の説話。朝廷（皇軍）が「まつろわぬ」先住民を討伐し、地名を改めたという一説の朗読
- ・鈴虫の音（ね）。松虫とは鈴虫のことであるが、能においては「松虫」の音の登場が霊的な世界に移行する合図となる
- ・都内某所、巨大ビル建設現場の地下で録音した切削音
- ・「桃太郎伝説」の鬼である温羅が住んでいたとされる鬼ノ城の環境音
- ・伴裕子による温羅についてのレクチャー
- ・伴裕子による犬飼武尊についてのレクチャー
- ・鳴釜神事が占う吉兆音
- ・祝詞
- ・8/15日の靖国神社にて。蟬の声とラッパの音
- ・5.15事件の再現。暗殺された犬養毅と青年将校のやりとりを中心に
- ・『英霊の聲』（三島由紀夫）の一節の朗読する声
- ・「奔馬」（三島由紀夫）の一説の朗読
- ・映画『桃太郎海の神兵』（1945）の再現音
- ・『古事記』の一節の朗読。崇神天皇段から温羅討伐についての朗読
- ・『吉備津宮縁起』より温羅についての一節
- ・『吉備津宮縁起』より身体をバラバラにされ殺された温羅が大吉備津彦命の夢枕にたつシーンの朗読
- ・吉備地方現地住民の温羅についてのインタビュー再現
- ・アーマーオン（天川御嶽）の前、豊年祭にて
- ・祖納のシチにてミルク神の登場を祝う弥勒節
- ・干立にてミルク神の登場とともに現れるオホホ神の笑い声
- ・妊娠中の作家による、錯乱状態時の呟き
- ・三原山噴火の爆発音。1986年の噴火の際に、火口近くの立入禁止区域内にて白井嘉則が録音。当時NTT職員であった白井は、傘を收音マイクに、ラジカセでその音を記録し、『地球の鳴動』と名づけ、テレホンサービスとして全国からの視聴を可能にした
- ・陸上自衛隊石垣駐屯地前の鳥の声
- ・陸上自衛隊石垣駐屯地前の抗議演説の音
- ・能「神歌」
- ・海の音
- ・禰疑野神社にて。土蜘蛛について語る現地の人とのやり取り
- ・早吸日女神社神社にて。「神武東征」について語る宮司の話

- ・鬼の窟にて。この古墳の由来について語る声・椎根津彦神社の風音。朝廷側についたが、もともとは土蜘蛛であったという見解もある椎根津彦を祀っている。この辺りは土蜘蛛たちが多く住む土地であったという
- ・犬吠（遠吠え）の生態模写
- ・「大王殿祭り（ウォードンまつり）」での犬吠。隼人に課せられた、「大嘗祭」などで披露される犬吠の原形とされる
- ・凶首塚巨石墳内の環境音。隼人討伐の際に持ち帰った隼人の首 100 個を埋めたとされる
- ・百体神社の傀儡舞台の環境音。隼人征伐の際に出された傀儡舞を由来とする
- ・三社祭の神輿の音
- ・下谷神社大祭の神輿の音
- ・「日本書紀」巻第二 神代下 第十段、ウミサチヒコヤマサチヒコの朗読
- ・熊野古道で降った雹の音
- ・澄蓮による、不動明王真言の慈救咒の一節。ノウマク サンマンダ バサラダンセンダン マカロシャダソワタヤ ウンタラタカンマン
- ・澄蓮による、不動明王真言の一節。トホカミエミタメ
- ・澄蓮による、不動明王真言の一節。ネンピーカンノンリキ（念彼観音力）
- ・鳥追い歌の一節
- ・カラスの鳴き声
- ・「関東大震災 102 周年韓国・朝鮮人犠牲者追悼式」にて韓国の農楽に由来する伝統芸能「プンムル」の演奏音
- ・シタタレ川周辺の環境音。三本足の白い大鴉が落ちて大量の血が流れたという
- ・入間川の水音
- ・射落とされた「魔」が祀られるとされる出雲伊波比神社にて流鏑馬の矢が的を射る音。
- ・高麗神社の環境音
- ・高麗神社周辺の住民によるインタビューの再現
- ・『広益俗説弁』（正徳 5 年 / 1715 年 井沢長秀著）による入間の由来伝説の朗読
- ・2017 年 9 月 20 日現上皇が高麗神社へ参拝した時の言葉の朗読
- ・皇居某所の環境音
- ・二重橋駅に流れる地下水脈の水音
- ・千鳥ヶ淵戦没者墓苑の環境音
- ・千代田トンネルを車で走る音
- ・千鳥ヶ淵と半蔵濠をつなげる暗渠トンネル内の水音
- ・皇居周辺を飛び回るニホンミツバチの羽音

リサーチ場所一覧

大分県

- ・宮処野神社
- ・城原八幡
- ・禰疑野神社
- ・椎根津彦神社
- ・玉来神社
- ・久津媛神社
- ・宇奈岐日女神社

- ・早吸日女神社
- ・蹴裂権現社
- ・白鹿権現
- ・彦山神社
- ・宇佐神宮

奈良県

- ・高鴨神社
- ・蜘蛛窟
- ・蜘蛛塚
- ・一言主神社
- ・石上神宮
- ・箸墓古墳
- ・橿原神宮
- ・神武天皇陵 / 四条ミサンザイ古墳

大阪府

- ・物部守屋大連墳墓
- ・松虫塚
- ・住吉大社
- ・四天王寺
- ・阿倍王子神社
- ・信太の森 ふるさと館
- ・聖神社
- ・聖神社内蜘蛛窟
- ・生國魂神社

岡山県

- ・吉備津神社
- ・吉備津彦神社
- ・鬼ノ城
- ・鬼ノ城ゴルフ場横穴式古墳
- ・造山古墳
- ・岩倉神社
- ・艮御崎神社
- ・温羅神社
- ・白山神社 (※首塚のある白山神社)
- ・楯築遺跡

和歌山県

- ・大斎原
- ・丹生
- ・那智の滝
- ・田の崎
- ・神倉神社

三重県

- ・ 鬼ヶ城
- ・ 花の窟神社

沖縄県石垣島

- ・ 天川御嶽（アーマーオン）

沖縄県西表島

- ・ 祖納
- ・ 干立

Special Thanks

THE ROOT BEER JOURNEY